



# 政令指定都市「堺市」誕生

桑野 巍

20数年前のこと、京都勤務の時にこともあろうに緑内障を患った。その時お世話になった眼科医をその後も年に何回か訪ね治療をお願いしている。眼圧を計り、点眼薬をもらう。医師は遠距離通院を心配して「わざわざ堺から京都まで来るのは大変でしょう。住まいの近くに眼科があるでしょう」と転医をすすめてくれる。続けて「堺は人口5万人くらい？それでも眼科はあるでしょう」という。

私は答えた。「先生、堺市の人口は約83万人、今年4月から政令指定都市に昇格します」といったら「大変失礼しました。和歌山に近いですかね」といわれて、今度は開いた口が塞がらなかった。先生の苦笑いの表情を見ながら、今時の堺市は知名度が低いことがわかり残念で仕方がない思いをした。

NHKのTVドラマ「黄金の日々」で昔の堺が紹介されて久しいが、いまなお境港市（鳥取県）と間違えられたり、大阪市の影にかくれて全国区的には地味な存在なのだろう。堺市に住んで30年以上経つが、恥ずかしながら堺市の木は柳、花木はツツジ、花はハナショウブ、市の鳥はモズを意識したことがなかったのだから、その無知ぶりは無責任といわれても仕方がない。

それでも少し古手の堺人たちは「ものの始まりなんでも堺」といい、自信とプライドを持ち続けているのも事実だ。その昔、包丁、線香、鉄砲、自転車、木造様式燈台、三味線緞通、傘、機械縫製足袋など、すべて堺から日本全国へ普及していったのだから堺の文明、文化の発展を自惚れてしかるべきだ。

古くから海上交通、交易の要衝として栄え「東洋のベニス」と讃えられた堺だが、いまもロマン溢れる歴史の面影が息づいている。観光用マップを開いても市域149平方キロの中央部に世界三大古墳の1つである仁徳陵が目立つし、履中陵など百舌古墳群が並ぶ。だが、「仁徳陵は堺にござる」といっても、御陵のカベは厚く、一般市民が参詣したり内部に近寄ることができないのが残念だ。古墳を壊したり、荒らしたりする恐れがあるから“公開”にいたっていないのだが、これでは観光資源たり得ないし、宝の持ちぐされだ。ユネスコの世界遺産に指定される

日が待ち遠しい。

堺市は中世の自治都市の名で専門家にはよく知られているが、それは安土桃山時代の食うか食われるかの戦乱の世のころ、各地の戦国武将は競って堺の鉄砲を購入し、力をつけようとしたころのことらしい。戦国武将の拮抗の上にならば権力の空白地帯として、堺の町の自治と繁栄が成立したのであって特異な自治都市だったようだ。だから、戦国の世を統一する天下人と堺の自治・繁栄とが並び立たず“堺を制するものは天下を制す”が天下人の間で実現した。そこには千利休らがつくった茶席という密会の場があったものの結局は戦国大名たちに利用されたのだろう。このころの堺の知名度はまさに“全国区的”だったに違いない。

その後産業都市として、文化都市として発展したが、震災などで町は打ちひしがれたもののそのつど再興するというフェニックス都市ぶりを発揮し、市制施行から118年、今度は全国15番目の政令指定都市だ。堺市民は胸を張ってよい。男女を問わず堺ゆかりの先達たちの心意気が強固な堺市を築き挙げたのだ。

平成18年4月1日は堺市が政令指定都市に昇格する日。大都市への移行が順風満帆に進んだかといえ、そうとばかりもいえない。美原町との合併をはじめ幾多の苦労があった。その苦労を苦としなかった行政マンたちとその裏方の努力には拍手を送りたい。同時にこの先大都市にふさわしい都市基盤の着実な整備、心の通った行政サービスの提供、福祉の増進策の推進を期待したい。

さて、堺市が未来に向かって活力や魅力を生み出し、オンリーワンのまちとして飛躍するには何が必要なのだろうか。それは地方主権時代の主人公である住民の市民意識の向上だと思う。市民一人ひとりが①権利と義務の関係をよく理解すること②自分だけ良ければいいを返上する③何でも役所に頼る姿勢の転換④協働の精神保持—を心がけることだ。そして行政側や議会には全国地方団体のお手本になるような創意あふれる改革を望みたい。

（自治大阪編集委員会顧問  
時事通信社元大阪支社長）